ニッポン 人・脈・記
jinmyaku@asahi.com

日本語の海へ 14

押しつけないで 女言葉

国語学者で婦人問題を研究した寿岳章子によると、日本語は日本社会における女性の位置を見事に反映した言語だという。１９７９年に出した「日本語と女」では、歌謡曲の中で男に「心を捧げ」「真心を尽くし」「傷つき汚れた」女の姿を分析した。

関東学院大教授中村桃子(57)は30年ほど前、寿岳の講演会に行き、本にサインをもらった。社会や文化の男女差を問うジェンダーの視点から日本語を勉強していると話すと、寿岳は添え書きをしてくれた。「ことばに　女の思いをこめる　秋の思い出」。その励ましが力になった。

中村は留学先の米国でフェミニズム運動に出合う。「女も男も人間らしく生きる社会にしたい」と思った。日本でもウーマンリブが話題を集めていた。帰国後、上智大大学院で言語学を専攻する。

女性語は敬語とともに日本語の特徴とされる。室町時代に宮中に仕える女官が使った女房詞が起源という説もある。中村によると、鎌倉時代から女性の心得を説いた「女訓書」は話し方について〈しゃべりすぎず、言葉を選び、必要のないことは言わない〉と規範を示した。

この考えは明治になっても修身の教科書や婦人雑誌に引き継がれる。女学生が「君、遊びに来たまえ」と書生言葉を使っていると新聞がやり玉に挙げたこともある。

第2次世界大戦に突入すると、「女性らしい」言葉遣いが日本の伝統と言われるようになった。中村は「東アジアでの日本語使用を正当化するために、日本語が優れていると証しとして女言葉が利用された」という。

中村の著書「『女ことば』はつくられる」は2007年に、女性運動家だった山川菊栄を記念した賞を受けた。

「女性が実際に使うかどうかでなく、使うべしという規範こそが女言葉だ」と中村は言う。規範として押しつけられる「女性らしい言葉」ではなく、自由な発想で自分らしい言葉を使いたいと思う。

東京農工大講師任利(37)は上海出身で、北京外国語大学で日本語を学んだ。日本語には女性語、男性語の区別があると知って興味を持った。

ところが、日本に来たら、女子大生が「ぼく」、男性教授が「かしら」を使っている。実際の日本語に男女の違いによる差があまり感じられない。現代日本語の性差をまとめた博士論文は、「『女ことば』は女が使うのかしら？」という本になった。

中国語とジェンダーを研究テーマにしている。中国社会科学院語言研究所の辞書で女偏の漢字は207字。奴（奴隷）、妬（ねたむ）、姦（かしましい）、妖（あやしい）、媚（こびる）……。マイナスイメージの字が多い。

名前も、男は「偉」「雄」「剛」と雄大で強い字が使われるのに対し、女は「莉」「花」「英」など美しく優しい字が多い。「男尊女卑」「男女平等」といった語順も男性中心の中国社会とつながっていると感じる。

留学生には、男性語と女性語の指導が欠かせない。男性が女言葉を使うと、無用の誤解を招く恐れがある。

武蔵野大大学院教授佐々木瑞枝(69)は30年近く留学生に日本語を教えている。小説「伊豆の踊子」を教材にして、留学生に会話文が男の発言か女の発言か質問したことがある。日本語学校の上級クラスだったが、語尾の「わ」や「よ」で男女を区別できる学生は一人もいなかった。

韓国の留学生は、日本で放送される韓流ドラマの字幕が母語にない女言葉に翻訳されていることに驚くという。

「現代の話し言葉で男女差は昔ほど目立たないにしても、文学やドラマの会話には残っている。そのことは教えるべきです。日本社会や文化の断面ですから」　（清水弟）

中村桃子さん

佐々木瑞枝さん

© 朝日新聞社　無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。